

## 神話の語りと景観

——近畿地方の「蛇髻入・苧環型」を事例に——

佐々木高弘

はじめに

私は、これまで、「蛇髻入・苧環型」について、文化地理学の視点から、以下の指摘をしてきた。

① 本伝承の神話・伝説・昔話へのジャンルの変容は、話の内側だけでなく、外要素をも変容させてきた。例えば、訪問する男の正体、訪問される娘の家、つきとめられた男の棲家などは、話や伝説の場合、実在する場所や家とともに語られる。いわば、話の外部の要素も取り込んでいる。従来の民俗学では、これらジャンルの変容を、神の零落という信仰心の変容ととられてきたが、そのことだけでなく、周辺の変容をも包含した問題であった。

② ジャンルの変容と外的要素の変容には、ある一定の法則を見いだすことが出来る。それを神話の変容モデルとし、神話モデル、伝説モデル、昔話モデルを設定した。<sup>(1)</sup>

③ 特に、神話や伝説のように、具体的な景観が提示できるジャンルにおいては、さらにいくつかの変容プロセスを示した(神話モデル、伝説モデル1-6)<sup>(2)</sup>。

④ 以上の点から、本伝承は、かつて地域を支配、あるいは開発した権力者の神話であったが、その権力者の没落とともに、伝承の所有者の変更、それに伴う、娘の家や蛇の棲家等の外的要素の変容があった。さらに、そのことが伝承の価値の位置変更、そして語りの内容の変化を生じさせたのではないか。それが日本民俗学の言う、神話の伝説・昔話への零落を意味したのではないか。

⑤ また、その変容は、ただ民話の内容や、権力者の交代のみを言うのではなく、古代から中世、近世へと時代が移行していく中で、日本人の価値体系の変容(魔術的支配から合理的支配)とそれに伴う、環境、つまり自然や風景や景観への眼差しの変容をも、写し出していたのではないか<sup>(3)</sup>。

本稿においては、近畿地方のデータを、できるだけ詳しく事例紹介しながら、今まで指摘した点を検証していきたい。

## 1 近畿地方の「蛇智入・苧環型」の特徴

近畿地方の、「蛇智入・苧環型」のデータ・ベースを作成する上で、基礎資料としたのは、関敬吾の『日本昔話大成』<sup>(4)</sup>、稲田浩一・小澤俊夫の『日本昔話通観』<sup>(5)</sup>、福田晃の『日本伝説大系』<sup>(6)</sup>である。これらに基づき、各地域において資料収集、および聞き取り調査をおこなった。その結果、奈良県においては、昔話6話、伝説70

話、和歌山県においては、昔話8話、伝説28話、三重県においては、昔話5話、伝説9話、京都府においては、昔話37話、伝説6話、兵庫県においては、昔話15話、伝説2話を得た。なお、大阪府、滋賀県については、上記の文献には、データがない。もちろん、完全にはないわけではないが、とりあえず本稿においては、対象から外した。また、兵庫県については、すでに論じたので、ここでは扱わない。

ところで、先に指摘した、神話モデル・伝説モデル・昔話モデルとは、本伝承がジャンルを変容させる際に、話の内容(話型)だけでなく、外的要素(来訪男、景観、娘の家)も対応させながら、変容する傾向を示したものである。それを、一般的なモデルとして示したのが、図1である。そして、本モデルの妥当性を見るために、全国データをチャート化したのが、図2である。神話モデルは、ここでは、出世型としている。出世型とは、本伝承における、娘と蛇の婚姻によって生まれた子供が、後に偉人となり出世する話型である。神話はこの話型を基本としており、神話がすでに存在しない現在においては、出世型がもっとも神話モデルに近い、と判断したからである。

図2では、円の上部にある、景観、娘の家、節句なし、が神話的要素を多く残す、原型に最も近いもの、として設定されている。それに対して、円の下部に位置する諸要素は、それらが伝説、昔話へのジャンル変容とともに、対応する側面を示している。つまり、神話的要素の零落であり、価値の変容をも示している。図の見方は、上部に位置していればしているほど、伝承の聖性が高く、下部に位置していれば、逆に俗性が高いと判断する。図2によれば、出世型が最も高く、次に伝説、そして昔話が一番、低い位置にあることが分かる。このことから、一応、全体の傾向としては、先の図1のモデルが、ある程度の妥当性をもっている、と言える。

	神話モデル	伝説モデル	昔話モデル
話 型	出世型	退治型	立ち聞き型・ たらい子型
来訪男	神（蛇体）	妖怪（鬼ある いは大蛇）	単なる蛇
景 観	山（神社）	山の頂上・ 洞穴・池	池・淵・石垣 ・不明
娘	姫（巫女）	地域の権力者 の娘	単なる娘

図1 三輪山の神婚神話の変容モデル  
 (佐々木高弘『民話の地理学』古今書院 2003, p182 より)

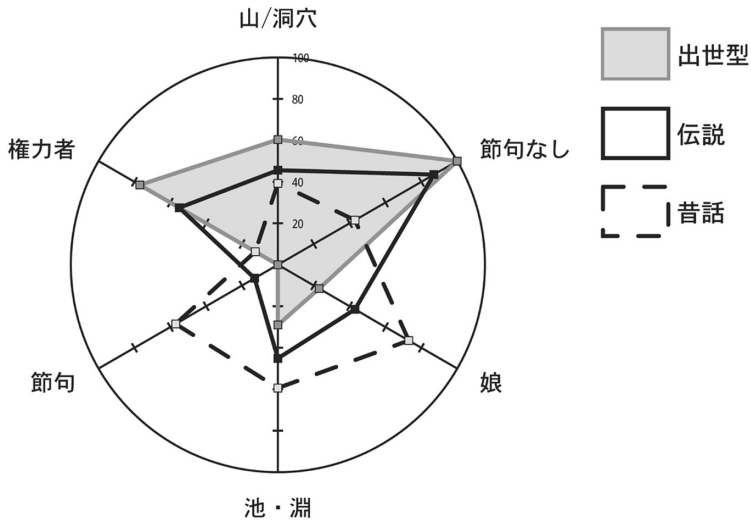


図2 全国の「蛇髻入・苧環型」伝説・昔話・出世型(神話モデル)の聖性・俗性

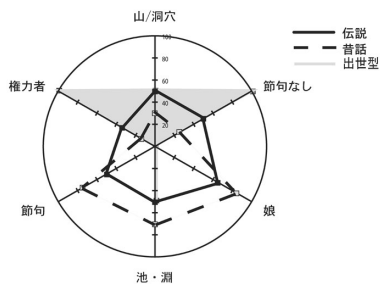
ろう。

近畿地方のデータを、同様の変容モデルで図化したものが、図3である。いずれの県においても、また近畿地方全体としても、伝説が上部に位置し、昔話が下部に位置しているのが分かる。全国平均と、県別の特徴を見ると、京都府の伝説が、全国の出世型よりも、聖性が高いことが指摘できる。奈良県、三重県、和歌山県は、ほぼ同様の傾向を持っているのも指摘できる点であろう。全国と近畿地方全体を比較すると、非常に似た傾向を持っていることに気付く。近畿地方の出世型は、三重県に一事例あるのみである。

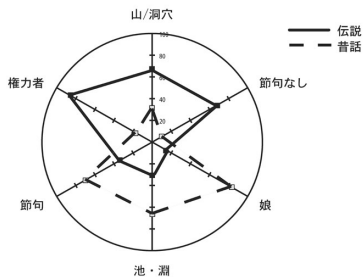
図4は、これら伝承の近畿地方における分布を図化したものである。それによると、本伝承は、近畿地方の北部と南部に別れて分布していることが分かる。先の図3、県別のチャート図の特徴から言えば、奈良県、三重県、和歌山県の類似傾向の要因は、この分布にあると考えられよう。つまりこれら三県の伝承群は南部的特徴をもっていると言える。また、京都府の分布が北部に偏っており、近畿南部の伝承群と、特徴を異にするのも、同じく分布に要因があるのかも知れない。兵庫県に関しては、北部と西部に偏っており、どちらかといえば、中国地方や山陰地方との類似性が見取れる。<sup>(8)</sup>これら地域ごとの傾向は、まさに、伝承の外部の問題である。

さて次に、それらの外部の要素を、詳しく見ていこう。まずは、近畿地方南部の特徴を持つと思われる、奈良・和歌山・三重県の伝説に焦点を当て、次に、北部に位置する京都府の伝説に焦点をあてることにしよう。なおここで、伝説のみを対象とするのは、先に述べたように、昔話と違って、伝説が外的要素を具体的に包摂して語るからである。

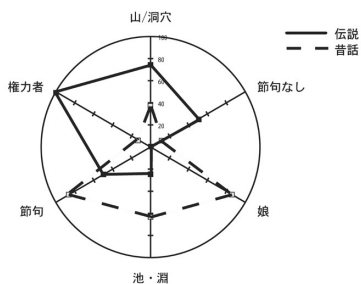
近畿地方



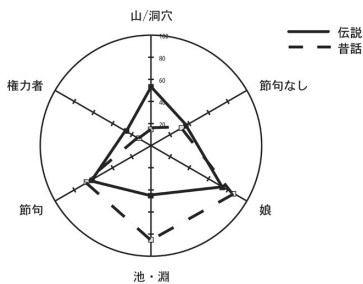
京都府



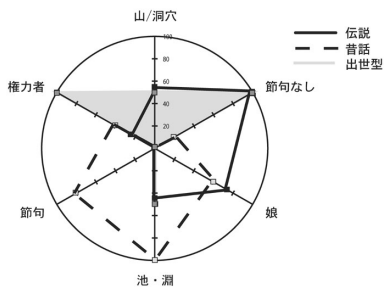
兵庫県



奈良県



三重県



和歌山県

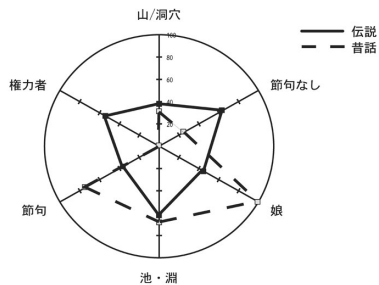


図3 近畿地方の「蛇蛭入・苧環型」伝説・昔話・出世型の聖性・俗性

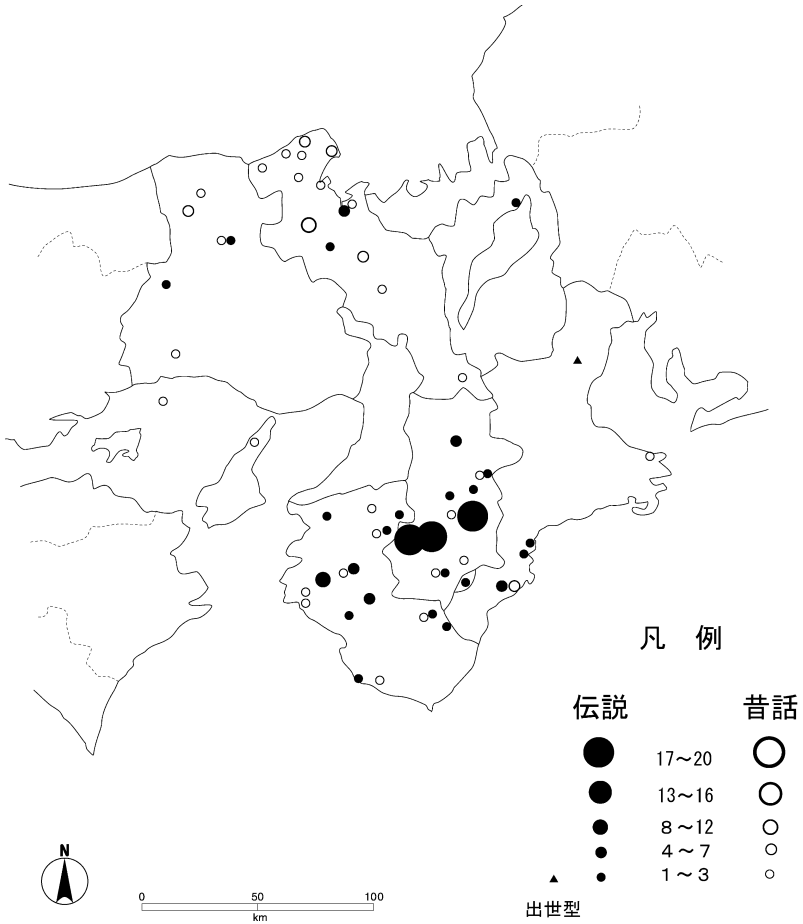


図4 近畿地方の「蛇簪入・芋環型」の分布

## 2 奈良県の蛇智入・苧環型の伝説

### (1) 三輪の神の伝承

奈良県は、ある意味で、このタイプの伝承の発祥地と言うこともできる。ある意味というのは、『古事記』にこの伝承が、三輪山の神婚神話として記載され、日本において確認できる、もっとも古い話だと考えられるからだ。それは崇神記に登場し、おおよそ次のように記述されている。それは、「イクタマヨリビメのもとに男が毎夜訪れ、ヒメは妊娠する。怪しんだ父母が尋ねると、娘は姓名も知らぬ男が通うことを告げる。父母は男の素性を知ろうと、赤土を床の前に散らし、紡いだ麻糸を針に通して男の衣の裾に刺せと娘に教える。夜明けに見ると、糸は戸の鉤穴を通り出て三輪神社に至っており、男の正体は三輪の神と知れる。この神婚によって生まれた子どもの裔がオホタタネコである」と。<sup>9)</sup>

この伝承をめぐって、さまざまな説が唱えられたが、その多くは、この伝承自体がすでに改編されているとしている。であるなら、これよりも古い伝承が、かつて存在したことになる。また、このタイプの伝承は、東アジアに広く分布しており、その意味でも、三輪山が発祥地であると、決めがたい面があるのだ。

私は、少なくとも日本においては、この三輪山の伝承を軸に、全国へ広がり、語り継がれていったのではないかと、考えている。

さて、奈良においては、その発祥地の記述ではなく、どのように語られてきたのかを見てみよう。例えば桜



井市では、次のように伝承されていたようだ。

「昔、緒環姫の許に、名を云はぬ貴人が通った。姫は、それが何処の何人とも知れないので、或夜糸をつけた針を、其人の裳にさして置いた所が、翌朝、その糸の端は三端山にいつて止まり、あとには三輪だけ残っていた。姫はここに始めて神のみこと知り、残りの糸を土に埋めた。それが緒環塚である。大神神社一の鳥居を出て、右折した街道端に、緒環塚がある。」<sup>(10)</sup>

また野迫川村には、次のような三輪素麺の由来を語る伝承もある。

「三輪の神さんは？姫に魅入りした。姫はその人の名も行き路帰り路も知れぬので母に相談した。ほいたら母は糸を針にさして袖に縫いつけとけと教えた。姫は教えられた通りにしておくと、明神さんの鍵穴に糸が引き込まれとった。明神さんは長者で、正躰見られたからにはちゅて、姫が一生身を楽に暮らせるようにと素麺の作り方を姫に教えた。姫はそのお陰で一生安楽に暮らせたとい。ほんで素麺には竜と姫の絵が描かれとんのやって言わな。」<sup>(11)</sup>

このように、残りの糸を埋めた「緒環塚」のような証拠物や、関西では有名な「三輪素麺」が、実はこの話と関係していたなど、これもある意味、証拠物となって伝承されている。このように昔話と違って伝説は、話の外にある、証拠物とともに語る場合が多い。このタイプの伝承を日本民俗学では、「蛇簪入・苧環型」と言うが、苧環とは、苧(麻)を糸に紡いで環としたものことで、この話型名も、先の緒環塚や緒環姫も、ここから来ているのだろう。

また、次のような興味深い伝承もある。それは東吉野の伝承である。

「三輪のなあ、明神さんを七回り半か回る蛇がおったんらしいがな。その蛇がな、毎日、その、何して、その、ええ娘になって、ほいで毎晩、そんな、ほんまかうそ知らんけど、かわちへみいて、その、遊びに行とたんやな。ほたら、ある男が見染めて、ほいで、「あんた、うちいみいて嫁さんに、そのくれえ毎日来るのやったら、なんなら嫁さんに来てんか」ちゅうたら、「わしは嫁入りでけへん」。せえから、その男も未練があって、ほで、ずーっとその糸を、その、つけたんらしいが、その糸をたぐって行てみたら、三輪の明神さんにあって、その三輪の明神さんで切れてしもうとったちゅうねやさかい。それは三輪の明神さんの伝説で聞いてますわな。<sup>(12)</sup>」

この伝承は、「蛇女房」と分類されるが、れっきとした「芋環型」である。ただし、蛇は美しい娘に化けるわけだから、今までの伝承とは男女が正反対になるわけだ。興味深いのは、この性の逆転が、場所の逆転をも示している可能性がある点だ。実は、『古事記』の神婚神話では、生まれた子供の末がオホタタネコとある。実は彼は、河内の出身だとされている。そのことから、河内の王が大和に侵入してきて、この話が出来たのではないかとする研究者もいる。そうすると、この話では、大和の蛇が逆に河内へと侵入しているわけだ。

このように、この伝承の場合も、性の逆転による内容の変化が、それだけでなく、外的要素である、蛇の棲家としての、場所を変化させていることが、見てとれる。しかもその性の逆転という内容の変化は、神話時代の場所の、位置関係の逆転をも包含させているのだ。

(2) 大塔村の伝承―家を建ててはならない伝承

大塔村には、いくつかのこのタイプの伝説が残されている。次の伝承は、篠原で採取されたものだ。

「むかし、篠原の久保(くぼ)とよばれるところに民家が数軒あった。その中の一軒に村一番の美人がいた。その家へ毎晩、ひとりの男がやって来て朝帰っていった。心配した母親は、その男の着物の袖にふじの糸を通した針を刺しておいた。翌朝その糸をさぐってみると大滝までつづいていた。それは大滝の主であった。その女はタライ一ぱいのブドウ子を生んだ。ブドウ子とは卵がブドウのふさのように群がってくっついて蛇や蛙の卵のようなものであるという。久保山のべっぴんの家が山の尾に建てられていたことから、山の尾に建ててはいけないということになった。今は付近の家も全く移転して跡だけしか残っていない。」<sup>(13)</sup>

この伝説も「苧環型」である。大滝とはその他の異話によると、篠原滝ともある。ブドウ子とは、いわゆる胞状奇胎のことで、妊娠初期に起こる病気で、葡萄状の囊胞となって、流産することがあり、その原因が知られていない時代では、その形状から、蛇の子を産んだと勘違いされたのだろう。私は中国地方でも、このタイプの伝説と、ブドウ子が結び付けられる伝承を、いくつか聞いた。

この久保というのは小字で、村境に位置する。そしてそこには家を建ててはならないという、禁忌が伝えられている。境界線は人々が神経をとがらせる場所だ。出来れば、誰も触って欲しくないと思うだろう。そこに建物を建てるのはもっての他である。だから、このような伝承になったのかも知れない。ただ興味深いのは、このタイプの伝承が、実は、どこに権力者の家を建てるか、それを占うものだ、と考える私にとっては、逆さまになっている点である。つまり、建ててはならない場所を、占っているのである。

神話が聖なる土地を選び、同型の零落した伝承が、忌むべき土地を選び出している。この神話の価値の逆転が、実在の場所の価値の逆転をも生み出している。この虚構の物語と実在の場所との見事な対応関係は、この伝承を場所の視点から研究することの意義をも支持する。と同時に、このタイプの伝承が、いずれにしても、土地を見る、そのような目的を持っていたことを示しているのだ。

惣谷にも、同様の家建造タプーの伝承がある。

「昔、その、きれいな娘さん、居ったんやて。ほいたらまあ、ものすぐ男前の人が、毎晩、来るんやて。

ほいで、親衆がもう、不思議なさかいな、ほんでに、その、糸と針つけてそうしといたら、淵に入っとった。淵まで糸引っ張っとった、ていうような話も聞いたことあるけど。ほんで、よう私らのお祖父さんになる人が言うたよ。「この川から、尾が伝た所へは、家を建てるもんじゃない。」<sup>(14)</sup>って。」

この伝承では、淵も家も特定されていない。かなり昔話化している、と言えるだろう。だが、次のような語りが、伝説であったことを思わせる。「ほんで、よう私らのお祖父さんになる人が言うたよ。「この川から、尾が伝た所へは、家を建てるもんじゃない。」って。つまりこの会話からは、この川と特定されており、尾が伝た所を、彼らは具体的に伝承し、そこには家を建てない、という現実とつながっていることが、分かるからだ。この地域に流れている川は、先の篠原滝の川と同じである。この二つの伝承には、関連があるかも知れない。聞き取りに、場所が曖昧なまま記されているのは、民俗学者が、場所に無関心なことを示している。

また、大塔村の阪本にも、次のような伝承がある。

「北山の頂上に大きな池があるという、その池の名前も祖母ちゃんに聞いたらな。大きな池が山の頂上に



すのか、固有名詞なのか、架空の山をいうのかが、分からないからである。先にも述べたように、やはり民俗学者は場所には感心がないらしい。語り手の家の近くで、聞き取り調査をしたが、北山という山を知っている人はいなかった。だからといって、実在の山を指していないとは言えない。かつて私が、韓国で同様の調査をしているとき、同じように、裏山という表現に出合った。で、現地で、ある山を指して、あの山は何て言う山ですか、と聞くと、ほとんどの人が「裏山」と言っていた。これは、もう実在の山である。日本でも、居住者が、地図にある山の名とは違って、方位で周囲の山々を見分けていることがある。

ただし、昔話にかなり傾倒しているという点は、否めない。なぜなら、最後に、蛇の話を立ち聞きし(立ち聞き型)、子を下ろす方法を知り、たらいに蛇の卵を産んでいるからだ(たらい子型)。このような話型が入る場合、私は、昔話化していると考えている。なぜなら、本来のこの話のあり方は、子供が産まれ、その子が出世(天皇や権力者)する話だからである。これらの話型は、その全く反対の側に位置づけられるべきだろう。また、先にも示したように、私のデータに基づく定量分析においても、昔話がこの話型を持つ率が高いのだ。先の図2・3では、この点を話型ではなく、節句の有無で示した。なぜなら、話型は、複雑に絡み合い複合的に出現するからである。それに比べて、伝承の中に現れる、子どもを下ろす、節句の有無は、明確に、伝承の両極を示しているからだ。

このように、地名の欠落と、話型の変容が、語りの、伝説から昔話への変容を促すのかも知れない。中井傍示にも、その変容過程を思わせる伝承がある。

「昔、どこやらの滝から(男)娘のとこへ通うて来て、親が案じて、着物の裾へ白い糸つけといたら滝へ

行っとった。そしてその人(娘)がどんな子産んだいうたら、蛙子みたいなんを盥いっばい産んだんやと。主の子だったんだろ。<sup>(16)</sup>」

ここでも、場所は、どこやらの滝とあるが、語り手の記憶が原因で、場所が特定できないのか、もともとの語りが、どこやらの滝、つまり「あるところの滝」を意味しているのかが、この資料からだけでは、分からないのだ。何度も言うが、聞き取り調査における、場所の確認は、神話の変容過程を知る意味でも重要なのだ。

ここでも、産んだのは蛙子とあり、前の伝承でも蛇の卵とある。これは、先に紹介した、ブドウ子と同様の形態だと思われる。それまでは、蛇の子を産んだとあるのだが、この地域では、ある種の具体的な流産を指して、このような伝承が流行したのかも知れない。

### (3) 天川村の伝承―南北朝内乱期の伝承

奈良県の天川村には、いくつかの淵があり、このタイプの伝説が残っている。

例えば弁天淵には、次のような伝説がある。

「この隣にな、中西ちゅう家に、別びんさんがおって。ほいで、その、どこともわからん人が、あの、まあ、遊びに来るんで、どっから来るんだらうって。来るとこわからんていうて。ほいて、その人が来たのに、あの、着物の端いむいて、針い糸つけて、ほいて、おいてあったら、ほいたら、この、この上の弁天さんちゅての、そいあったていうんだけど。まあ、人によったら、「そやない、ミタライだった」って言うんやし、どっちがほんまか、そりゃ知りません。ほいて、それを、その糸をくわえとったてい

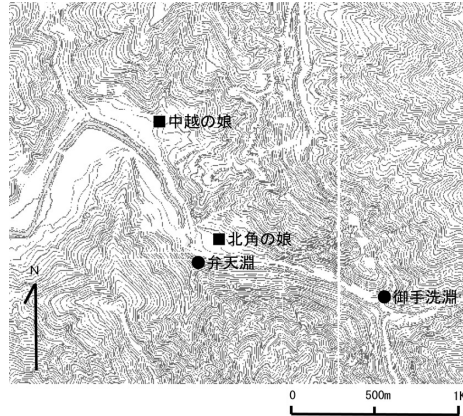


図5 天川の「蛇簪入・苧環型」の景観

うてな。ほいたら、その娘に、何ちゅうていいんか、子供ちゅうのか、蛇の子ができたっていうての。そないいう話は伝説みたいに聞いてます。そやけども、それがどうなったかはそんなん知りませんけどな。蛇の子は、その、ミタライいもってってぶちやけたちゅいいますんや。<sup>(17)</sup>

また、異話として出てくる、みたらい淵にも同様の伝承がある。

「川合のな、まあ、村の長者がな、あの、むかし、庄屋やろかな、その人に、まあ、一人娘がおったんですわな。そこへ、まあ、夜ごとな、あの、若い青年が来るんで、ほいで、それが、さあ、どこの住民ともわからん。まあ、夜ごとな、美男子ですわな、通うてくるんらしわ、娘に家いみてな。ほいて、それ、住所もどこも言うてくれんしな、ほいて、その親しも心配して、ほいて、その、ある夜のことな、娘に、あの、その男の着物のすそいみてな、まあ、糸の端をくり付けといて、ほいて、その糸をたぐっていたらわかるようってに、ほいで、その糸を結んでな、ほいてまあ、夜が明け方になつたら、まあ、男が帰るんですわな。ほいてまあ、あの、明るる日、その糸をたぐって行たらな、ミタライの淵のとい行とったいんです。ほいで、そのとき、あの、娘は妊娠しとってな、ほいて、その妊娠してできた子が蛇の子であつちゅて。ほいで、その、あすこ、まあ今は御手洗いうに書いてますけど



な、あれ、三つのたらいという、その何ですわ、あれ、ミタライというのは。そのいわれの、あま、その淵の名前がそれから出たんですな。<sup>(18)</sup>

これら伝承群の中には、聞き取り調査によって、娘の家や、蛇の棲家が確認できるものがある。そうするとこれらの位置関係も明らかになり、おおよそ南東方向という、三輪山の原型と同じ方位を示していることが分かる(例えば、図5の中越の娘や、北角の娘と、御手洗淵の方位関係)。場所的要素が、神話的要素を保持していると言えるだろう。ただ、みたらい淵の伝承の方は、異話が多く採取されており、その中には、蛇が美女に化け、集落を彷徨うという伝承もあり、地域による変容には差があるようだ。

また、天川村のみたらい溪谷には、南北朝時代の歴史も残っている。この溪谷の頂上にある観音峰には、天川郷士が後醍醐天皇の皇子、護良親王や長慶天皇を案内し、潜んだ洞窟がある。この伝承が各地で南北朝の内乱期と関係しており、ここでもみたらい淵、弁天淵を含めて、武家方と争った宮方の権力維持と関連があったのかも知れない。これも伝承の外的要素と言ってよいだろう。

#### (4) 野迫川村の伝承―国見の眼差し

奈良県野迫川には「お辰墓」と呼ばれる、一連のこのタイプの伝承が、広く分布している。その内容は、一風変わっていて、またこのタイプの伝承を考える上で、大変示唆的でもある。それは次のような内容だ。

「昔、お辰という美人が立里の荒神さんの東、タイ谷に炭焼き娘として住んでいた。すると、高野山の若い僧が、それを見染めて毎晩のように通った。嚴重な戸じまりをしておいてもだめであった。何の音も立

ずに入ってきた。お辰はとうとう母親に、毎夜ごと若い僧がくることを話した。母親は。その男のえりに針に糸を通してさしておくと教えた。娘のお辰はその通りにした。明くる朝、みると糸は障子のすき間から外に出ていた。それをつけてゆくと川の淵で大蛇は傷ついてうなっていた。それによって若い僧は高山の人でなく大蛇の精とわかった。お辰は、それから身ごもって蛇の子を生んだ。そして病んで死んだ。その時にお辰は遺言に「死んだら三里四方(十二キロ)見える見晴らしのよいところに葬ってほしい」と頼んだ。それで立里から荒神へまいる途中の道ばたに二つの石を重ねて「お辰の墓」をつくった。いたらみてこい、荒神裏の、お辰の墓から霧が立つ。<sup>19)</sup>」

私の手元に類話が22ある。多い、といって良いだろう。伝承地は、野迫川村(立里<sup>3</sup>、池津川<sup>5</sup>、今井<sup>2</sup>、上垣内<sup>3</sup>、北股<sup>3</sup>、辻堂<sup>1</sup>)、大塔村(堂平、中井傍示<sup>2</sup>)、天川村(山西、和田)に渡る。これも広い範囲に渡る、といって良いだろう。蛇の棲家は、この事例にあるように、川の淵と伝えるのが4つ、滝が2つ、池が1つ、具体的な地名を指して、妙谷の滝とするのが13、でん淵(妙谷滝から1キロ上流)が1つ、となる。また娘の家についても、娘とだけ伝えるのが3つ、木地屋の娘が4つ、炭焼きの娘が1つ、山小屋の娘が1つあり、地名を付けて、妙谷の炭焼きの娘とするのが5つ、妙谷の滝の山小屋の娘が1つ、立里の尾根の炭焼きの娘が1、妙谷の木地屋が1つある。また娘の名を伝えるのが、お辰が3つ、おとよが1つあり、また相馬氏の娘とするのが1つ伝承されている。

伝説には記念物がつきものである。ここでは、お辰の墓が伝承されており、実在する。話型は、芋環型が19話、たらい子型が15話、なかには、産まれた子が、ぶどう子だったとする伝承が、やはりここにもある。



写真1 お辰墓からの展望(北)

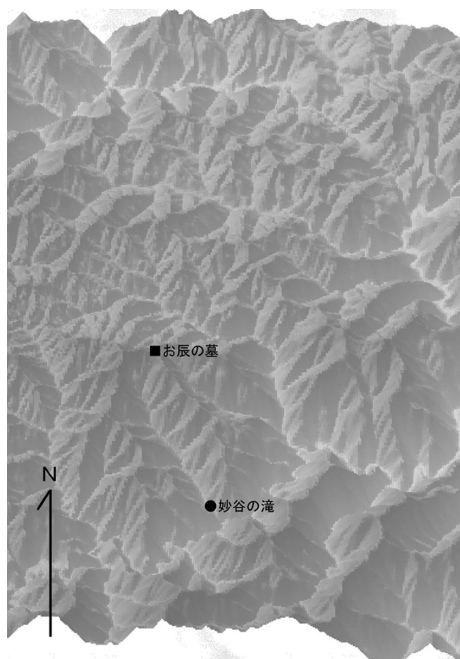


図6 野迫川の「蛇簀入・苧環型」の景観

興味深いのは、蛇が化けた男性像だ。その多くが、高野山の僧としており、高野山との様々なレベルでの関連性が示唆される。お辰墓のある荒神岳は、荒神社があるが、その縁起によると、弘法大師が勧請した霊神とある。以来、高野山の高僧は、代々参詣していると伝承する。そのような点が、この来訪男に反映しているのかも知れない。

何よりも興味深いのは、多くの伝承にも見られるのだが、娘が死ぬときに、事例にあるように、「死んだら三里四方(十二キロ)見える見晴らしのよいところに葬ってほしい」と頼んだ点である。確かに、このお辰墓からは四方が見渡せる(写真1)。さて、この大蛇に騙された、あわれな娘の、見渡せる場所に墓を建てて欲しい、

という不可解な遺言は、何を意味するのか。

この伝承を三輪山の神婚神話と関連づけるなら、この遺言は、国見を意味しているのではないか。国見とは権力者が高いところへ登り、国の様子を見ることで、一般の人々の視点には、かつてはなかった風景への眼差しである。ということは、この伝承の娘の遺言から、娘の家と権力との結びつきをうかがうことができる。また、土地を見るということは、土地の善し悪しを鑑定することにもつながり、先にも書いたように、この伝承は、本来は王の住む場所の選定にかかわるとの私論を、まさに支持してくれる伝承なのである。

しかしながら、図6の3D図を見て分かるように、この周辺は、強大な権力を支えるような、生産性の高い土地とは思えない。であるなら、なぜ権力者がここに住もうとしたのだろう。伝承のなかには、娘の家が、平家の落人の家系であるとする言い伝えがある。この紀伊半島の南部には、都から落ち、隠れようとした貴族たちが多くいた。そのような人たちが、隠れる際の場所選定に、この伝承を使ったのかも知れない。

#### (5) 十津川の伝承―開拓の始祖の神話

奈良県の十津川にも、このタイプの伝承が見られる。

「今から二百年ほど前のことである。上野地の川向い、なかしまというところは、そのころ人家も多く、豊かな田畑が広がっていた。ところがいつの頃からか、何者かによって作物が荒され、収穫も少なかった。なかしまに「中根」という金持ちがいた。この家にお若という美しい娘が、女中として働いていた。…ところが、このごろどうしたことか、あれほどよく働いていたお若が、物思いに沈み、…こうしたお若のよ

うすに気づいた中根の主人は、：「お前のところへ毎夜たずねてくる男は、一体、どこの誰なんじゃ。：」ところが：お若は自分をたずねてくる男が、どこの誰だか、まったく知らなかったのである。：困りはてた主人は、：「よいか、男の気付かぬうちに麻糸をつけた針を、たぶさの中に差し込んでおくのじゃ。その糸を追っていけば、どこの誰かは、すぐにわかるじやろう。：」さて、その夜のこと、お若は主人の言いつけどおり、縫い針に白の麻糸をつけ、男のすきをみつめて、たぶさの中にそっと差し込んだ。：麻糸は朝露に濡れ、垣根越しに畑に降り、そして昼なお薄暗い藪の中を通り、やがて、なかしまのはずれにある、油を灌えたような大池の底深くへと沈んでいた。：主人から糸の行方を聞かされたお若の驚きは大変なものであった。：その後、嵐の夜は決まって、青い火がただひとつ大池の周りをさまようのであった。このことがあってから、なかしまの田畑が荒れることはなかった。お若をあわれに思った村人は、大池のほとりに小さな祠を建て「大池の御前若の宮(お若大命神)」として、毎年、祭を行った。付近の村では、「かわいい娘は、なかしまへやるな、上は立崖、したも崖、中に蛇の巢の池がある」と謡われた。明治十二年の大洪水で、なかしまは厚い土砂の下になってしまった。が、大池だけは、わずかにその跡を残していた。毎年行われる国王神社の祭礼の日、行列が、なかしまの真向かいの一本松付近に来ると、そこから大池の御前若の宮に向かって、感謝の一礼をするのがならわしであった。<sup>(20)</sup>

この伝承は、中根という家の開拓にまつわる話であろうか。というのは、伝承が田畑のことで始まり、かつては豊だったこと、その後土地が荒らされ、収穫が落ちたこと、しかしこの事件があってから、田畑が荒らされることはなく、お若が後に若の宮として村人の感謝の念を集めていたこと、などがそう思わせるのだ。図7

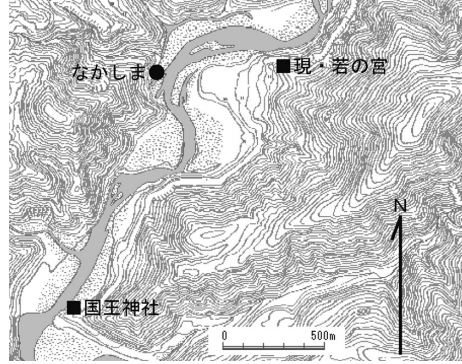


図7 十津川なかしまの「蛇竪入・芋環型」の景観

で見てわかるとおり、中島は、川の中にある中洲のような場所だ。このような場所は、洪水があればひとたまりもない。そのような場所を開拓し、田畑を作る作業は容易ではない。実際、洪水で今は埋まってしまったとある。それが、この娘のお陰で、中島だけは嵐でも荒れないとある点からも、この土地の、守り神的な要素を見出すことが出来る。これらの点から、今まで見てきたように、このタイプの伝承が、やはり土地を選ぶ際の、神話であったのではないかと考えられるわけだ。

「毎年行われる国王神社の祭礼の日、行列が、なかしまの真向かいの一本松付近に來ると、そこから大池の御前若の宮に向かって、この一本松付近に來ると、そこから大池の御前若の宮に向かって、という伝承も、興味深い。国王神社の祭神は長慶天皇である。長慶天皇は、南北朝時代の南朝第三代天皇で、天川村のみたらい淵のところでも書いたように、この伝承も南北朝の内乱と関係があるのかも知れない。

十津川には、まだこのタイプの伝承がある。それは村の、神聖な場所としての宮田に関わる伝承である。

「…玉垣内の入口の道のはたに大きい田んあろう。あの田は、もとは大きい底なし沼じゃったんじゃあと。…この底なし沼には主がおる。その主は何百年もこの沼に住んでおる、ぐちなわじゃちゅうことが言い伝えられておったんじゃあ。その頃、その沼の近くの大きな家に、きれいな女の子ができたんじゃ。女の子

は：西川じゅうでも一番の別嬪になったんじゃあ。その娘が十六になった年の春のある日：娘が一人ねよったら、一人の立派ななりをした若い男がその娘の部屋へ忍びこんできたんじゃと。ほいて、男は、なあにも言わんと一番どりが鳴あたら、だまって出ていってしもうたんじゃと。娘はちよっと心配になったんじゃけんど、あんまり立派ななりをした男じゃったよって、そのまま親にも言わずだまっといたんじゃ。ほいたら次の月の十日の夜もまた、：そがあにしよるうちに、：娘のそぶりでだんだんわかってきたんじゃ。ほんで親らも心配になって、「月の十日になったら、お前んとこへ来る男はだれなえ、どこの男なえ。」ちゅうて聞いてみたんじゃけんど、娘もさっぱりわからんよって、：そこで両親は思案したあげく、「こんど十日のようさ男がきたら、針に糸をつけておいて、その男がいぬときに、そっと着物のすそへぬいつけておけ。：」ちゅうて、娘におしけ(教え)といたんじゃ。娘は、：糸と針ゅう支度しといて、男がいのう(帰る)としたとき、：着物のすそへさしといたんじゃあ。ほいてから、朝みんなが起きてから、三人で糸をたぐっていったら、：糸は、その沼ん中へはいつとるんじゃあ。さあ、三人はびっくりしてしもうて、：娘はねこう(寝込んで)しもうし、両親は、：おこってみてもしょうがないし、：そがあなことがあってから：山伏がその村を通りかかり、娘の家の前で足をとめて、「：どうもこの家じゃ、最近、何か悪いことんあったようにみえるけんど。」ちゅうんじゃと。ほんで娘の親は、：一部始終をはなしゅうしたら、「ほんじゃ、おれが祈禱をしたろう。ほいたら、もうその主もこんようなるよって。」ちゅうて、：山伏にたのんで、ちゃんと祈禱をしてもうたから、その後は、なあにもなかつちゅうこつちや<sup>(21)</sup>。」この伝承も、田の開墾に関する内容を伝えている。また娘の家も大家で、地域の支配者であったのではな

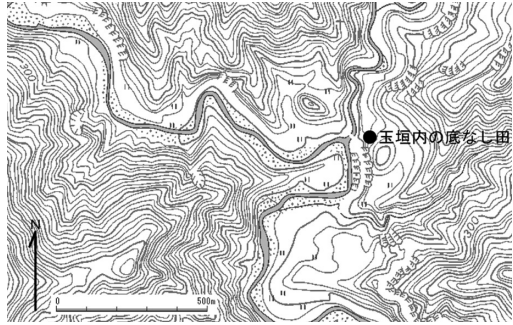


図8 十津川玉垣内の「蛇簪入・芋環型」の景観

ったか。聞き取り調査で、この田の場所(図8)は確定できたが、彼らは、上記のような伝承の内容は知らなかった。しかし、この田は、湿田で確かに水がよく出る、とのことだった。

この伝承も神話的要素を残している。例えば、この田が宮田とある点である。宮田は神田ともいうが、神供にあてられる田地で、地域の人たちからは、聖なる場所として認識されていた。神話であるなら、この娘のもとへ通う男は、神の化身であるから、その棲家が聖なる場所であるのは、理に合ったことなのだ。であるなら、この大蛇は、蛇体の神で、三輪山の神と同じ姿であることになる。

この大家がこの地の開拓に際して、使った神婚神話と言えるかも知れない。

(6) 川上村の伝承―水没した集落の開拓神話

川上村入之波にも、このタイプの伝承が残っている。

「蛇はね、蛙を取ってね、蛙を飲もうとして蛙くわえてしとったんでね、お婆さんが蛙かわいそうに思うてね、「蛙を助けてやってくれ。こらえてやってくれ。そしたら自分とこの娘やるさかいに」言うたらね、すぐに蛇が逃がしたってねえ。ほいてしたときに、娘とこ来るさかいね、そのときに男になって来るらし



いですわ、うちへ。それから、「その娘をくれ」言うて何回も来るんやてね。ほんでその人がどこへ帰るやしらんと思てね、その人に針い糸刺してね、着物へ縫いつけたらしいですわ、糸を。そしたらその人がズーッと引っ張ってね、ほいて向こへ行ったら、大きな大木のね、氏神さんの神木の上へあがってるねて、その糸がね。ほいで見たら、上に穴があってね。そこへ大蛇が入っとるって。それからもう、あら大蛇に違いないさかいに焼こら言うてね、どっさり何かを積んで焼いたらね、蛇が頭を二回も三回もさし上げたけど、焼けて死んだ、とかいうような話を聞いたことありますわ、昔話にね。<sup>(22)</sup>

この伝承は、少々変わっている。というのは、別の話の型と思われる内容から始まるからである。蛇が蛙を食べようとしているところに、婆が来て、蛙を助けてくれたら、娘をやる、というのは、通常、蛙報恩型と分類される伝承の出だしに似ている。この話型では、後に蛙が、助けてくれた恩に報いるために、娘を助けてくれる。しかし、この伝承にはその部分がなく、後半は、これまで紹介してきた、芋環型になっている。伝承はこのように、二つの話型を混合させながら、変容する場合もある。

このように話型に注目し、娘の家や場所も特定されなければ、昔話としてこの伝承を扱うことの方が有意義だ、と民俗学者の多くは主張するかも知れない。しかし、私が気になるのは、蛇の棲家が、氏神の神木という点である。氏神だけでは、あるところ、と何も変わらないかも知れないし、語り手にとっては、自分たちの集落の氏神の神木という、生々しい経験に基づく、実在の古木を指しているのが分からない。現地に行つて聞き取りをしたところ、確かにここには、氏神があり、神木もあったということだが、実はダム建設のため、現在集落ごと水の中に沈んでいるとのことだった。



写真2 奈良県川上村の水没後の入之波

写真2は、現在のダムの水面を映し出しているが、水没する以前の集落は、図9によって復原することが出来る。それによると、集落の中心の少し南側に氏神があることが分かる。神木から大蛇が通ってくるという伝承は、そう多くはないが、私の手もとは、いくつかある。徳島県の伝承では、やはり神社の神木から、大蛇が村の娘の所へ通い、怒った村の男たちが、神木ごと焼いてしまう話があるが、それに似ている。また静岡県の伝承には、神木の木霊が男に化けてきて、村人たちに、その木が切り倒された、とある。実は三輪神社にも神木があり、「巳の神杉」と呼ばれ、そこには蛇が棲んでいると言われている。したがって、三輪山説話の神話的要素を引き継いでいると言うことも出来るのである。また、この神杉は、江

戸時代には「雨降杉」と言われ、「雨乞い祈願の時に、村の人が集まり、お詣りをしたようだ。この点も、このタイプの伝承で、雨乞いに関連する話が各地で見られ、三輪神社の継承かも知れない。

いずれにしても、神社から男が来るとするのは、三輪山説話の重要な要素であることに違いない。しかも、集落の南に氏神があるのも、三輪山とほぼ同じ方位を示している。であるなら、男は神であり、しかも蛇体であった、ということになるのであるだろうか。そう考えると、この伝承も、この谷を開発した始祖の神話であった可能性が高まるのだ。

このように、奈良県の伝承を、いくつか紹介してきたが、いずれも、三輪山の要素をどこかに残存している

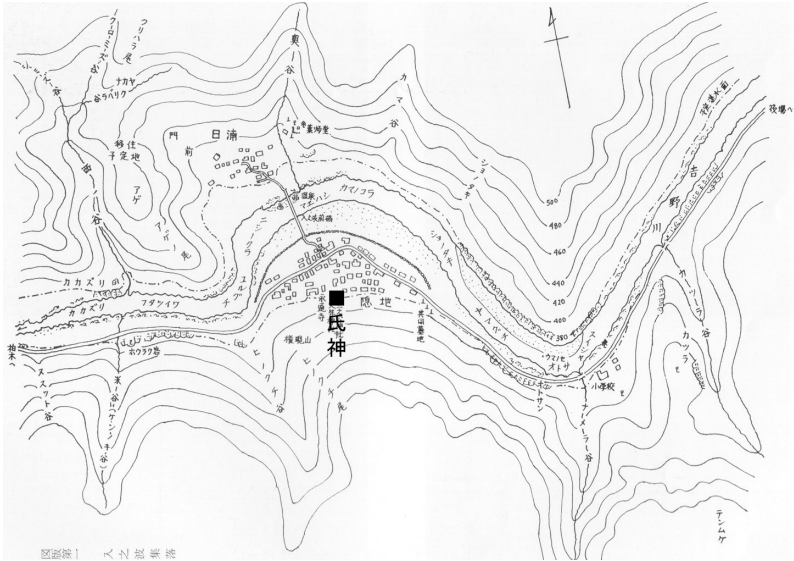


図9 奈良県川上村の水没前の入之波全区  
(『入之波地区民俗資料調査報告書』川上村、1968。)

ようだ。ただ、山間部の伝承が多く、三輪山周辺とは、地形的にも異なり、そのことが、少々、性格を異にしているようにも思う。それと、その他の地域と異なり、南北朝内乱期の南朝の舞台になったことや、平家の落人をはじめとする、中央政権からの離脱者の隠れ場所となった諸事情が、これらの伝承に何らかの影響を与えているようにも思える。

このように伝承は、記述された文献と違って、一見、はかないし、危うい、とされる資料かも知れないが、豊に地域の特色や時代の特性、また何よりもそこに棲み暮らす人々の思いが、込められているのだ。その伝承の力は、たとえ集落が水没しても、今なお、ここに見いだすことが出来るのだ。

### 3 三重県の蛇智入・苧環型の伝説

#### (1) 出世型の伝説

近畿地方の出世型の伝承は、次の三重県の事例しか残っていない。もちろん、奈良県の崇神天皇の神話は、除外しての話である。それは、次のような伝承である。

「野村の富士山は、亀山で一番高い山だ。この山の南と西は、蛇谷といわれる深い谷で、松の繁った底には、青々と水をたたえた池があって、人々は清谷の池とよんだ。昔、殿さまのともをして、狩に出た侍が道にまよってしまった。…この池のそばを、あてもなく歩いてみると、一人の娘があらわれた。「わたくしは、きよというものですが、父母がともども死んでしまい、蛇谷に住まうこともできません。…どうか、わたくしをお助けくださいませし。」侍は…ふしんに思った。しかし、…侍は、娘を連れ帰った。…侍の父母にも…よくつかえるもうしぶんのない娘であった。…侍はこの娘を嫁にしたいと思い、娘もこの侍を心よく思っていた。…父母のゆるしもえて、侍と娘は幸せな家庭をつくった。三年の年月が楽しさの中に流れ、嫁はみごもった。十月十日がたった時、「わたくしは、一人でお産をしたいと思えます。どうか赤んぼうの元気なうぶ声をするまで、うぶやをのぞかないでくださいませ。」…しゅうとめさんはふすまを細くあげ、そつとうぶやの中をのぞいた。すると驚いたことに、八畳間いっぱいにとぐるを巻いた大蛇が、…産んだばかりの赤んぼうの体をなめていた。…見られてしまったことをさとした嫁は、かなしそう



写真3 三重県亀山市「野村の富士」

に言った。「…こんなへびの姿を見られてしまったら、この家に置いていただくわけにはまいりません。この児には、この三枚のうろこをせんにじて飲ませてください。」…今まで晴れていた空は、にわかにはげしい夕立となり、ふりしきる雨の中をいかずちに乗った大蛇は、天空高くのぼっていった。へび嫁が残したうろこをせんにじて、赤んぼうに飲ませると、いったとおり、赤んぼうはすくすくと育った。…そして、成人した若者は、亀山藩につかえるあっぱれな武士になった<sup>(23)</sup>。」

このように、生まれた子が出世する伝承を、子供出世型と呼ぶ。ただし、ここでも性の逆転が起きている。また針と糸の話もないので、厳密に言うると、「蛇智入・芋環型」ではない。しかし、伝承で語られる外部の要素、ここでは場所に注目すると、芋環型と共通する点が浮かび上がってくる。その場所とは、野村の富士と言われる、亀山で最も高い、とされる山である(写真3)。この話型の原型と考えられる、崇神天皇の神話も、奈良県桜井市の三輪山で、まさに富士山のような綺麗な円錐形の山であった。神話では、このような神が降臨する山を、世界山と言う。それが亀山という地域にも実在し、そこで神と人が結婚する、神婚神話が伝承されていた、と考えれば、同系統の話と判断できるわけだ。

このように、伝承というのは、話型だけに注目した場合、全く別の伝承と分類されることになるが、しかし、話の内部だけでなく、外部に位置する、場所の要素にも注目することによって、同じ系統の伝承である可能性が、指

摘できるわけである。

(2) 江戸時代の要素を取り込んだ伝承

三重県の尾鷲市にも、「蛇髻入・苧環型」の伝説がある。それは次のような伝承である。

「昔、むかしのことです。尾鷲市の中井浦に庄屋さんという庄屋さんが住んでいました。この庄屋さんの家には、お雪というたいそう美しい娘がいて、尾鷲小町と呼ばれていましたが、この娘はまた評判の孝行娘でした。庄屋さんの家は呉服屋さんでしたが、このお雪を一目見ようと若者たちが毎日のように白布を買いに店にきました。そのうちいつの間にか美しい青年が来るようになりました。この青年は冷たいばかりに美しい顔で、すぐお雪と親しくなりましたが、どんなに尋ねても住所も名前も告げませんでした。そのうち近所の人たちが、あの冷たい美しさは、きっと竜神さんの化身だろうと、うわさするようになりました。こんなうわさに困ったお雪は、日頃信心していた安性寺の尼さんにお話ししました。尼さんの意見によって、青年の帰るとき着物の裾に絹糸をつけておきました。お雪が糸巻きを持っていると、絹糸は一晩中のびて行きました。翌朝尼さんとお雪は、その糸をたどって行くと、糸は銚子川をさかのぼって竜の谷まで延びていました。深い淵のところまでくると、対岸の岩の上に美青年がにっこりと笑って立っていました。そして尼さんとお雪に話しかけました。何をかくそう、私はこの淵に住む竜神の息子です。尾鷲の中井浦に、親孝行の美しい娘がいると聞いて見に行つたのです。お雪さんがあまりに美しいので、つい毎日通ってしまいました。もうお会いすることもないでしょうが、どうか幸せな結婚をして下さい、あ

あなたの親孝行をたたえる意味で、私が尾鷲の人びとを守ってあげますよ。言い終わると、青年は煙のように白蛇になって、深い淵へ吸い込まれて行きました。<sup>(24)</sup>」

ここでも、娘の家は地域の権力者である。庄屋というのは、江戸時代の権力の末端のようなイメージがあるが、その家は結構、古くからの地域の権力者である場合が多い。伝承自体も、江戸時代の要素が多い。例えば、娘に助言を与えた尼のいる、安性寺は、元禄〜明治一〇年の寺である。もうすでに存在しないが、絵図(尾鷲之図、文政六年)<sup>(25)</sup>に残っているので、場所はわかる。

このように、一見新しい伝承のようだが、それでも古い神話的要素も併存している。それは、通った男が竜神という点である。そしてその神が、地域の守り神になっている点もだ。娘の家と寺、そして竜神のいた谷の位置関係を3D地図(図10)で見ると、娘の家に比べて、竜神の棲家は、かなり山の中である。娘の家の裏の池とか、川の淵というのと違って、このようにある程度の大きなスケールを持っている場合、やはりある地域を支配した神と権力者が想定できる。このような場所の要素も、この伝承の神話的痕跡を支持している。

### (3) 久保の小女郎

三重県には一風変わった伝承がある。それは熊野市育生町の伝承で、長年育て上げた娘が、実は蛇の子だっ

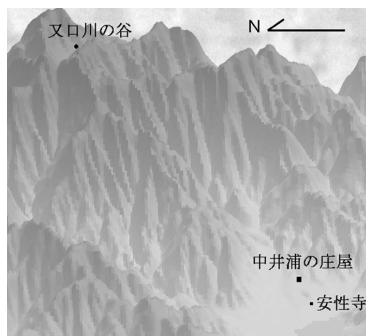


図10 尾鷲の「蛇髻入・苧環型」の景観

たという話である。

「昔、大沼に「久保の小女郎」（二説には「小白」ともいう。）と呼ばれるたいそう美しい娘がいた。その髪の毛も非常に長く、櫛で梳かすにも、竿に掛けて梳かさなければいけないほどであった。ところが、この娘は毎晩、決まった時間になると何処かへ出かけて行き、朝になると草履は濡れていて砂がついていた。両親は不審に思い、話し合った結果、娘の着物の裾に白い糸を縫いつけておき、夜、小女郎が家を抜け出した後、その糸をたどっていった。すると、糸は北山川を渡り、大井の蛇の池までつづいて池の中に没していた。母親は声をあげて「小女郎、ひとめ顔をみせろ！」と言うと、ザワザワと水面が波立ち、中から小女郎が姿を現した。その姿は顔だけが人間で、身は蛇体になっていた。小女郎は池の主の蛇の落し子であったという。」<sup>(26)</sup>

長年育てた娘が蛇だった、ということは、かつて、母親のところへ、蛇が通っていたことになるわけだ。娘が二十歳頃なら、二十一年も前ということになるのだろうか。両親はそうとは知らず、育て上げ、年頃になると、様子がおかしいので、針に糸を通して縫いつけ、糸を追ってみると池まで通じ、娘が蛇だったというわけだ。これは、今までの伝承とは、ずいぶん違う。が、元は同じだったのかも知れない。

異話を調べてみると、同町の別の地域では、蛇が男に化けて通ったとある。これは、元の話の型だ。この伝承では、池も別の場所で、「つの池」(図11)となつて<sup>(27)</sup>いる。場所の変化は、話の内容をも変容させる。またその逆もあるだろう。また別の地域では、小女郎には想う男があつて、その男に誘われて池の蛇体になったのだ、ともいわれている。また、この池の主の二世と恋に落ちたので、蛇に変身したという伝承もある。このように、



伝承は地域や人々によって変化する。

また、災害に関係する「その後、小女郎は蛇に化けて出てきては強雨などの天災を起こした。それで、その霊を鎮めるために田野野峠の上に蛇を2匹彫った石碑を立て小女郎の霊を祀った」(図11)という伝承もある。この伝承が、災害に関わる事例は、他にもある。

この場合、娘の家を特定している伝承もあるが、その家が権力者の家であったかどうかは不明である。しかし、特定されている場合、その可能性は高い。事例で紹介した、娘の家と池のある場所は近いが、異話として紹介した、つの池の場合、少し離れていて、話も原型通りであり、方位も三輪山と同じ南東方位を持つ。こちらの方が元の話だったのかも知れない。しかし、地図にあるとおり、開発すべき土地も少なく、もともと異なる系統の話であったのか、あるいは、小さな土地の開発であったために、このような伝承になったのか、謎の多い伝承である。

#### (4) 災害と関連する伝承

熊野市の伝承は、蛇に変身した娘が大雨を降らせ、災害をもたらした。その他にも地滑りを起こし、村を全滅させる伝承や、大雨を降らせる伝承もある。これらはいずれも災害に関わるのだが、海山町の伝承は、雨ご

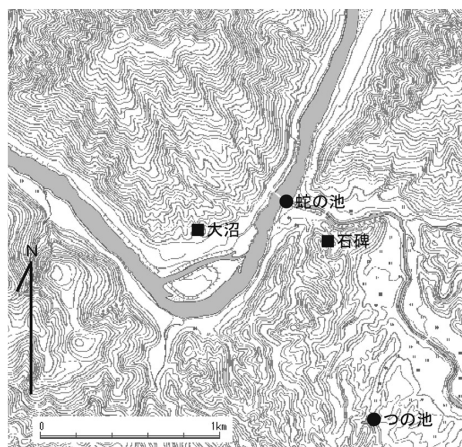


図11 熊野市育生の「蛇髻入・苧環型」の景観

いにつながらる。

「河内から奥へ四キロばかり入った所に、「せば谷」という深い谷がある。昔は、吉野三瀬谷から紀州へ抜ける道として利用されていたのではないだろうか。そのころ、この「せば谷」で炭焼きをして生活をしている一軒の家があった。この家に、「おいま」という娘がいて、夜なべ仕事にわらじを作りここを通る旅人たちに売っていた。おいまが作るわらじは、ここを通る旅人たちに重宝がられよく売れた。また、ここを通る旅人たちにはいろいろな身分の人たちがいた。おそらく平家の落人たちであったのだろう。おいまは、そんな都から来る人にかすかなあこがれを持っていた。ある晩、おいまは夢を見た。その夢は、若い公達のような身なりをした都人が、せば谷の滝の上から手を振って、「こっちへ来い」というように手招いている。おいまは、滝の方へ歩いていった。よく見ると、滝の前に夢で見た若者が立っている。このようにして、おいまは都の若者と毎晩滝のそばで会っていた。ある晩父はおいまのぞうりに糸をつけておいた。父はそっと糸をたどって、後からついていった。その時、滝つぼから上がってきて娘の前に現れたのは大きな龍だった。おいまは、その日から急に寝込んでしまった。すると、また不思議な事が起こった。次の日も、その次の日も軒下下げた売り物のぞうりがぬれている。それはおいまの魂が、ぞうりをはいて出てきたのである。滝つぼに着くと、大きな龍が出てきた。父親はおそろおそろ大きな声で「娘が病気になるてしまった。もう今後娘を呼ばないでくれ」と叫んだ。父親を見た龍は、そのまま消えてしまった。父親が家に帰ってみると、おいまはふとんの中で冷たくなっていた。後の世になって、人々はこの滝のそばに祠を建てて、滝とおいまを祀った。それからこの滝をおいま

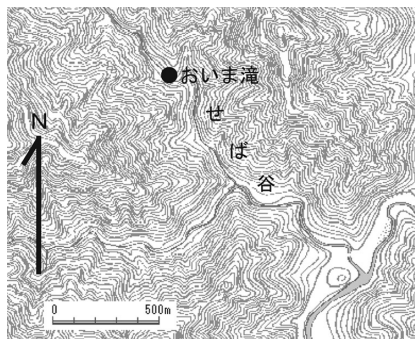


図12 海山町の「蛇罎入・苧環型」の景観

滝と呼ぶようになった。おいまの命日になると今でも雨が降る。それは、龍とおいまの涙が雨となって降るのだといわれている。雨が降ってほしい時は、ここに来て雨ごいをする<sup>(28)</sup>と雨が降るといわれている。」  
このような悲しい話で、今までのような地域開発の様子もうかがえないが、平家の落人という点は、やはり奈良県の特性と類似性を、雨ごいという要素は、やはり、地域の農業と宗教にかかわる点が、伝承をになっている。

それにしても、三重県の伝説は、何か娘の悲劇性を強調する傾向がある。最初の話は、蛇が身よりのない娘に変身して武士の所に助けを求めるし、前回の話は、成長した娘が蛇の子だったという伝承になっている。また尾鷲市の伝承は、この話と同じく男の正体は龍だった。この点も共通している。

また場所も、非常に険しい山の中で、開拓すべき土地もあまりないような場所である(図12)。その点も、前回に指摘した伝承と似ている。このように見えてくると、紀伊半島の南に位置する三重県の南部では、この伝承にもあるように、平家の落人に代表されるような、都落ちをするような貴族が身を隠す場所として、隠遁し、中央で語られている、王権始祖神話を、小さな谷で語り継ぎ、彼らのアイデンティティを保ったのかも知れない。

#### 4 和歌山県の蛇簪入・苧環型の伝説

##### (1) 紀伊半島の伝承の特性

和歌山県にも、このタイプの伝承が残っているが、紀伊半島という類似する地理的条件からか、奈良や三重と類似する点が多い。例えば、和歌山県の中津村では、次のように伝承されている。

「田尻に貝野清五郎という人が居た。事業に失敗して九州へ一家が蓄電したままだが、その先祖の話やうやが、娘さんが居てね。そこの毎晩蛇がおとこまいに化けて遊びにくんねとい。どっからともなく来て、どこかへ去んでしまう。母親がこいつ怪しいと見て、どこい去ぬんか見てやれと思うて、娘に言うて、男の着物の裾へ針で糸と通した奴をつけといた。あくる日、その糸をたどったら田尻の端の、川原に出来た池へは行ってたそうや。田尻にゃ田が八町歩あったが水害で流れて川原が大きな池になってたんやな。母親はびっくりしてな。それから娘を会わせなんだが、たらい一ぱいの蛇の子を産んだちゅう。小釜本橋のその橋詰めから二〇メートルほどの所に竜五さんという祠が祀ってる。正月元日が祭で貝野一族で祀ってるんや。」<sup>(29)</sup>

ここにある娘の家は特定できないが、カイノウラという地名が残っている(図13)。また、一七八六年に書かれた文書(「龍田義美家所蔵文書」<sup>(30)</sup>)に、この伝承と類似の話が残っている。それは、この貝野浦という場所を、開拓しようとしたときの話である。ただし、この文書の記述者は、蛇が人に化けるといような話を否定してい

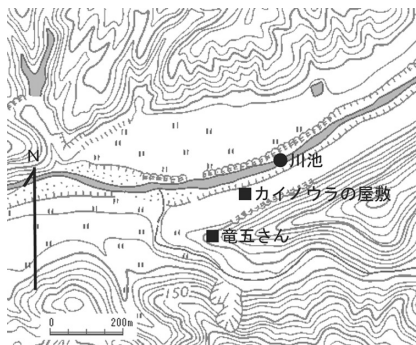


図13 中津の「蛇智入・苧環型」の景観

る。つまりこの時点で、もう神話ではなくなっている、ということがわかる。なぜなら、蛇体の神と人の間に産まれた子が、開拓の祖である、だから信仰するのだ、という態度が見られないからだ。それでも竜五さんとして祀っているのは、この信仰の名残かも知れない。おそらく、これ以前にあったこの神話を、この時代においても開拓に際し、使ったのではないか。

このように、狭い谷における、狭い土地の開拓という地理的条件は、紀伊半島に共通する要素であり、そしておそらく、古い時代には、この神話を語って開拓したのだろう。この伝承が面白いのは、近世の古文書に残っている点である。近世においては、もうすでに、蛇の子を人間の女性が産むなどということは、信じられていなかったということが明確に記されているからだ。ただ、それは、古文書を書き残すような、知識階層の考

えで、そのような話が人口に膾炙されているということは、そうでない階層の人たちは、ある程度、真実として語っていた、ということをも示している。古代はもちろんのこと、中世においては、地域によっては神話として生きていた伝承が、近世においては、階層によっては信じられなくなり、そうでなかったりする。そうになると、神話は徐々に、伝説へと姿を変えていくのだ。

このように、和歌山にも、紀伊半島の伝承の特徴が出てくる。一つは、先に紹介したような、狭い谷間の開拓に関する伝承である。狭い土地の開拓、定着に、本来は大王家の始祖神話を利用するのは、少し

大げさなような気がするが、ひょっとすると、当時の中央政権に関わる人たちの、そのなかでも、そこから離脱した人々、例えば、平家の落人であるとか、南北朝内乱期の南朝側の人たちが、その落ち延び先の、狭い土地の開拓、定着に、由緒正しい、神話を使ったのではなかったか。そのことを支持する事例は、奈良や三重でも見られる。であるなら、中央政権からの離脱組の伝承が多い、というのが紀伊半島の二つ目の特徴となろう。本宮町には、次のような伝承が残っている。

「本宮町の平治川という所で）蛇が男になって女のところへ通って来た。どうもおかしいというんで、その、教えられて、若者の住所も氏名も語らないし、夜明けに帰るから、というんで、その袴の裾に針に糸を通しておいて、夜が明けて、その糸を尋ねてずっと行くと平治川の滝壺に消えておったと。それから、その女が身ごもったと。菖蒲湯をせんじてその女に飲ませたと。そしたら、蛇の子供を流産したと。」<sup>(31)</sup>

一見、先にあげた、紀伊半島の特徴を、何も備えていないように見えるが、しかし、この平治川の滝壺に注目してみると、次のような伝承に遭遇する。「高さ50米余り滝が二段になって、うつ蒼とした森林の中に白い帯状に落下している。湯峯温泉6キロ上流口平治に在る、源平合戦の頃傷ついた平家の落人がこの滝で身体をいやしたと伝えられ、付近には落人の隠れ住んだと言う要害森山が在る」<sup>(32)</sup>と。

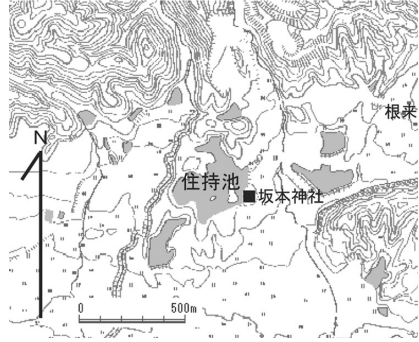
もう一つ、南部川村清川には次のような伝承がある。

「おっきな池があるんやてな、大きな池があつて、ぐるり回るのに、それこそ豆一升囓むちゅうぐらいな大きな池やつて、その土地に娘さんがあつて、その娘の付き添いの女中さんがいっつもその池行って遊んでな、ほいて娘にその池の水付けて髪解いたんやて、すと、その娘がその池の水付けねば髪が解けんよ

うになってんと。むつぼれたの池の水行つて付けたらきれいに解けるし、ほいで、解けんようになったから、そうしてしょっちゅう付けやつてんと。ほいたら年頃になったときにね。あの、娘の部屋から、どなに錠かんかんにしめといても、男の人が出る姿が見えるんやてな。ほいでふしぎに思つて、その親がな、「今日はわしが寝間上げたろ」というて上げたところが、鱗が落ちてあつてんと。蛇の鱗が。ほいで、「これは不思議や」と思つてな、ほいていろいろとしたら、そのうちにその娘がお腹が大きくなつてきたさか、そのときに三月の桃の花だけ、今の三月に桃のお花お雛さんに供えるやろ。その酒と、ほいて五月の菖蒲酒と飲んだら、もしも蛇の子だったらおりするさかちゅうてな、そいでその子に飲ましたんや。ほしたから蛇の子がようけいおりたて。今でもその菖蒲酒は、女の人いたたくもんやちゅうわ。五月の菖蒲酒と三月の桃酒だけはな。女の人にも男の人でもそいからいたたくようになってんちゅう。そんな昔話聞かしてもるたわ。根来やていうた。根来の池やて」<sup>(39)</sup>

この話も、上述のような特徴を、備えていないように思えるが、この伝承の異話が、おおよそ次のような内容を持っている。それは、娘の家が「唐和(康和?)、一〇九九―一〇三三のころ、根来山の麓、西坂本に室家右兵衛尉忠家という豪族があつた」とあり、その娘が、上の伝承のように、「だんだん成長していく桂姫は、住持池の水をつけなければ髪は梳けなかつた。それでいつも住持池の水を汲んできては梳いていた。桂姫が年頃になったころ、どこから忍び入るのか毎夜毎夜丑満時に彼女の枕元へ美男が現われ、そしてどこへ行くともなく消えていくのだった」とある。先にあげた根来の池とは、住持池(図14)のことだろう。さらに、この娘は、「ちようどそのころ、和泉国尾崎の大原源蔵高広という北面の武士に嫁ぐ約束がなつた。いよいよ嫁ぎ行く日

(2) 和歌山県の特徴



14 の「環」

の

(34)

簞  
・  
・  
・



ぐ、という言い方には、語弊があるかも知れない。が、この伝承が日本民俗学において、「蛇簪入」と命名され、神話学から見れば、「神婚神話」と称されるのであれば、婚姻の一つの形態として、女性が男性のもとに嫁ぐ、という結末は、従来の物語分類の視点としては、ふさわしい表現であろう。ただ、伝承する人たちが、そのように表現しているわけではない。多くの場合は、娘が蛇のもとへと連れ去られた、という場合や、蛇に変身してしまった、あるいは、入水したという表現になるのだ。婚姻というものは、男女双方の血族の合意が得られない場合、あるいは、その結果としての、両血族の同盟が成立しない場合、単なる、略奪に過ぎないのかも知れない。

和歌山県熊野川町には、次のような伝承が残されている。

「今は昔相須に一軒の旅人宿があつて、ここに一人娘の絶世の美女がいた。名はお姫。ところが或夜から水も滴る様な美男の若者がこの宿へ毎夜毎夜遊びに来る様になった。初めのうちは両親も気がつかなくなつたが、娘は毎日二足の草履を作る様になった。そして夜中に娘の姿が家の中に見当らない夜が続く様になった。然し不思議な事に朝には必ず寝床に入っているが、庭に脱いでいる娘の草履はいつも水に濡れていた。一策を考えた家人が或夜、こっそり娘の着物に白糸を通した針をつけておいて、翌朝ひそかに白糸をたよって行ったら不思議にもこの涿まで白糸が続いていた。娘は家人の注意を一向に聞こうともせず、とうとう数ヶ月後に行方不明になってしまった。家人や村人総出の捜査の結果、この涿の辺に二足の草履が脱ぎ揃えているのを発見した。娘はこの涿の主を身を捧げて投身したものだと思ひが一致して、娘の冥福を祈る供養をして、この涿を姫壺又は姫涿と里人が呼ぶ様になつた。」<sup>(35)</sup>

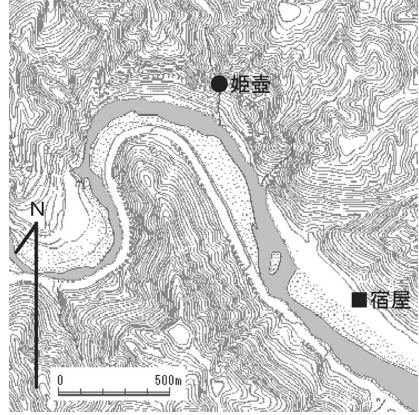


図15 熊野川町の「蛇簀入・芋環型」の景観

このように、伝承には「嫁ぐ」とあるのではなく、「淵の主を身を捧げて投身」という表現を使っている。このタイプの伝承は、通常、蛇が化けた男に、針と糸をつけるのだが、娘に付けているのも、ある意味で変形と言えるだろう。聞き取り調査によって、場所もおおよそ特定出来る(図15)。紀伊半島に共通する、狭谷の伝承であることが分かる。方位は三輪山の様式とは反対に、蛇の棲家である滝は、北西に位置している。

また、美山町、龍神村、花園村にも、娘が滝に入る伝承がある。これらは、昔話化している伝承もあれば、娘の家や蛇の棲家を具体的に伝える伝説もある。神話と昔話の対極的な違いは、神話においては、娘に蛇体の神との子が誕生し、その子が成長して出世するのに対し、昔話は、蛇の子を下ろす点にある。その意味でこれら伝承には、積極的に神話的要素を見いだすことは出来ないのだが、花園村の伝承は、娘は人の子供を産んでいる。その意味で、神話的要素の残存と言えるのかも知れないが、その結末は、次のように悲しいものであった。

「それから十月十日たって玉のような男の子生まれたんやか。一と月たって宮詣りに行くのに、綿帽子がなけりゃ詣れんていうて。家ア貧乏だったんで綿帽子を買えなんだんで、そいで泣く泣く帽子なしで宮詣りに行きよったんやね。ほいたら河太郎淵に白いええ綿帽子が浮いておったんで、それを取ろうと思て、手をさし出いたらそのまま親子諸共、淵の中へ引きこまれてしもたんよ。」<sup>(36)</sup>

人間の子供を産んだのだが、結局は、この娘も淵に姿を消したのだった。今もこの淵を見ることが出来る(写真4)。

### (3) 世界創造神話

和歌山にも、性の逆転した、苧環型がある。日置川町安宅の次のような伝承である。

「ある晩、息子が美しい娘と出会った。息子が誘うと、

娘は息子の家に通うようになった。母親はなんとかして娘の正体を知りたいと考えていた。そのうち、娘が納戸の灯の下で髪をすいているのを見た。なんと、髪のがすがすべて蛇になっていて、驚いた母親は、息子の嫁になっては困ると考え、娘の着物の裾に木綿針をとおしておいた。二晩ほどして、娘は、母親の主だ、針を抜いてもらわんと私のからだは腐ってしまう」と嘆くので、針を抜いて、二度とこの家に来るな、<sup>(37)</sup>と言いつけると、それから来なくなったということである。」

ここでは、通う娘の髪の毛の先がすべて蛇になっている。いわゆるメドゥーサである。メドゥーサは、ギリシア神話に登場する女神だが、世界の神話において、女神や蛇が登場するのは、共通して「創造神話」である。私は、この「蛇髻入・苧環型」と称するタイプの伝承が、土地開拓の始祖にまつわる神話であると、主張してきたが、それは、王朝の始祖でもあり、その国を創った始源を伝える物語、つまり「創造神話」でもあるわけ



写真4 花園村の「河太郎淵」

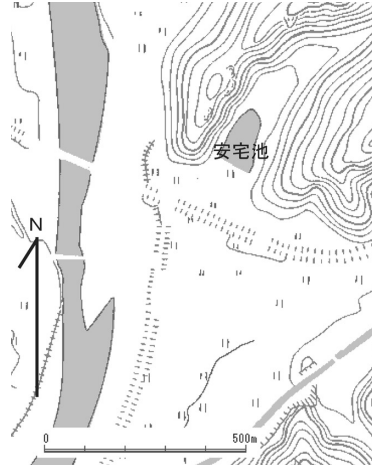


図16 日置川町安宅の「蛇簪入・芋環型」の景観

だ。

この文脈で、この伝承を考えるのであれば、この地域の始祖に関わる神話的要素を充分に示していると、言える。

しかも、興味深いのは、具体的な場所(図16)、具体的な風景とともにこの伝承が残っている点である。人々の想像力と、場所や風景が密接なつながりを持ち、そのつながりの中から、人々の生活空間が生み出されていく過程が、ここに見て取れるからだ。

同じく日置川町の市鹿野にも、同タイプの伝承が残されている。

「こちらに久保地という字があるんですわよ。そのKさんという方の娘さんがあってんと。毎晩のように男が遊びに来るらしいね。最後にはね、男の人がへびだったということですわ。まあ、大川のはたに谷口という所があるんですわよ。川下の所(地藏さんの祀っている所)から谷口まで洞穴で通っていたらしんや。その娘さんがお腹がふくれてきたんや。そいたらそのお母さんがどうもおかしいということで谷口へ行ったらね。「もう子もつけてきたからな安心や」という話を洞穴から聞こえてくるのを聞いた。そいたらアオヤ垣内という所で、へびの親が言うにはね、「それは、つけてもな、五月の菖蒲の酒を飲まれたらね、それはもう全然あかん」という話をしたらしんや。それをその娘の方の親が聞いてね、戻ってきた。そして五月の菖蒲酒を飲ましたらね、たらいにいっぱいへびの子を生んだという。それでね、女の人は五月の

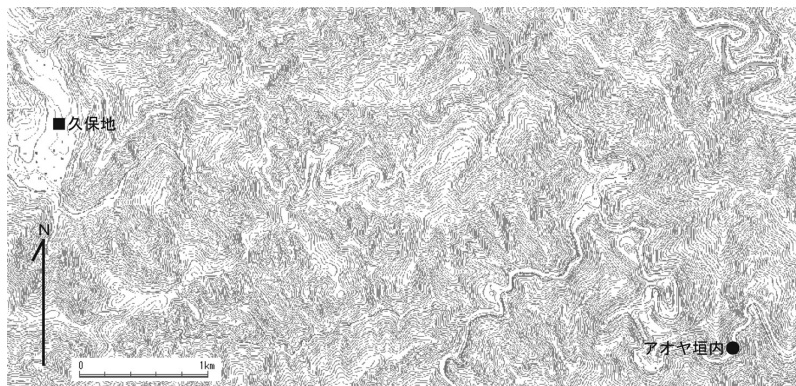


図17 日置川町市鹿野の「蛇髻入・芋環型」の景観

お節句に菖蒲酒だけは必ず頂くもんやということや。」<sup>(38)</sup>  
しかし、ここでは、針と糸の話が出てこない。厳密に言えば、芋環型ではないわけだ。しかし地図上(図17)で、娘の家、そして蛇の棲家を確認すると、三輪山と同じ方位を持っていることが分かる。伝承には現れなくとも、場所に神話的要素が残っている場合もあるのだ。

## 5 京都府の蛇髻入・芋環型の伝説

京都府で語られている、このタイプ伝説は、主に北部に集中しており、したがって、近畿南部の伝承とは、異なる特性を持っている。例えば次のような伝承があげられる。

「これは何鹿郡綾部町の東北、猪倉と云う部落の話である。ここに高城と云う城があって、その城主と称する立派な男が、毎夜のように猪倉のお八重と云う娘の所に通って来たそうである。お八重は部落切つての美人であったが、男があまりに立派な風采なので、別に怪しみもせず睦言を交わした。しかし通つて



写真5 綾部市「位田の高城」

来るのに、戸や障子を開け閉めせず、室に現れる事が不思議の一つであった。そのうちにお八重の腹が膨れ出したのに、驚いた両親は詳細の話をきき、去る法師に教わって高城の主である蜘蛛のなす業だと云うので、大盃に子を生んだところ、女郎蜘蛛が三杯もでたと云う。そしてお八重はそのまま死んでしまった。死骸を埋めた所がお八重塚である。<sup>(39)</sup>

もう一つ、話の筋はほとんど同だが、若干異なる伝承がある。

「綾部市の井倉の大貝家は代々美人の筋であったが、これに目をつけた高津の蜘蛛が毎夜々々、美男の武士に化けて通った。そのうちにみごもった娘は、ある夜、男の足に針をさした。男が帰った後、そのし

たたる血痕をつけて行ったら、位田の高城という山の峰で蜘蛛が死んでいた。まもなく女は多くの蜘蛛の子を生んだ。その美女の墓は今、井倉のコージン藪にある。<sup>(40)</sup>

このようにほぼ同じ伝説だが、少しずつ違ふところがある。このように伝承というものは、語り手や、伝承してきた集団によって異なる話となるのだが、これを異話(ヴァリエーション)と言う。フィールド・ワークでは、このような異話を数多く聞き取りして、なぜ集団ごとに、ある部分が違ふのかを研究する。

最初の伝承は、舞鶴市で採取されたものだが、後のものは、綾部市で採取されている。伝承自体は綾部市のものであるから、例えば、娘の家は、後者の方が具体的に語られている。その代わり、男の正体については、

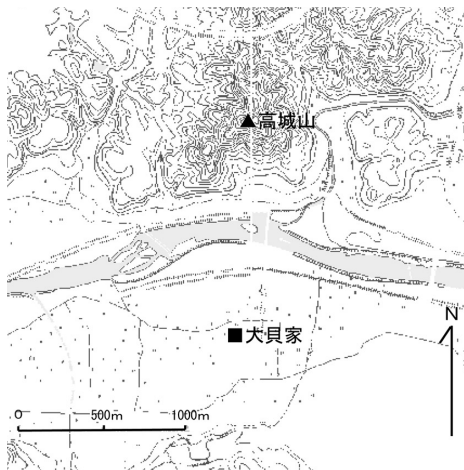


図18 綾部市の「蛇簀入・苧環型」の景観

舞鶴市の方が、高城山の城主というように具体性を持っている。また話のタイプも、「たらい子型」が、前者で語られているのに対して、針を刺して、男の居所を知るのは、後者となっている。

このように、話だけみると、異なることも多いのだが、フィールドに出て、場所を確認すると、男の居所である、高城山も高城という山も、同じ場所であることが分かる(写真5)。また娘の家も、同じ家のような(図18)。

『綾部市史(上巻)』<sup>(41)</sup>によると、この綾部市位田町に位田城があったとされるが、詳しいことは不明のようだ。また、位田城に関するものでは、位田の乱があり、延徳元年から二(一四八九―一四九〇)年に、在地の荻野・大槻氏と守護代上原氏の間で起こっている。この戦いは、守護方の軍勢に加えて、但馬・摂津などが上原氏に加勢して、位田城を攻めたとある。が、位田城主が誰であったかは、不明のようだ。在地の荻野・大槻は、後に明智光秀の丹波平定の戦いに敗れて、帰農していったとみられる。

また、中世の井倉には、地頭の城館があったとされるが、姓名は不明だ。娘の家が権力者(神話の所有者)という原則から見れば、中世の地頭の伝承であると言える。が、しかし、高城山は娘の家からは、北に位置し、三輪山とは方位を逆にする。ただし、山の形状はよく似ている。中世の権

力と戦国期の城主が同系統に位置するのか、あるいは、別であって伝承のみが受け継がれたのかが、不明であるが、しかしながら、この伝承も、権力の所在する場所の話であり、もし地域の開発に関わる始祖についてのものであれば、これも神話と考えることができるだろう。

また、このように、この神話にもとづいて地域を支配した権力者が、戦国時代に没落する事例は、その他の地域でも見られる特徴である。

ただし、ここで紹介した京都府の伝承では、三輪山の神と同じ蛇の姿ではなく、蜘蛛となっている。古代において蜘蛛と言えば、土蜘蛛を思い起こすが、『古事記』や『日本書紀』では、天皇側から見て討伐すべき異族になっている。そのような古代の、痕跡をも残す伝承と言えるかもしれない。ちなみに、通う男の正体が、蜘蛛であったとする伝承は、佐賀県、富山県にもあり、日本海側の特性と言えるのかも知れない。

京都府にはもう一つ同じ系統の伝説がある。伝承地は、舞鶴市朝来岡安。

「岡安の村の北端、峠の上に大なる池あり蛇ヶ池と称し、往昔此地に大蛇住めり。時人は其の池の傍に立寄るときは影を吞まるべしと恐れ登尾を越す峠道を特に左右二筋に作り、即午前は西の方を午後は東の方側を往還したる様であった。今を去る凡一千二百年前、泉源寺村に殿さんと尊称する豪族があつて、一人の娘の許へ夜な夜な通ふ忍び男あるにより殿さん夫婦深く心配し、或夜密かに芋のつづね糸の長きに針を附し、先夜忍び男の脱ぎ忘れし裾に縫ひ附けおきたるところ、翌朝に至り戸の節穴より外に出で其芋糸は、遠く岡安の峠の池にあとを引いてきているのを見届け、大に驚き帰り直ちに討伐に取かつたのである。大蛇は池を追い立てられ中山まで、逃れ出たが此時討手の中に希代の弓の名人がいて遂に大蛇を此の地に於



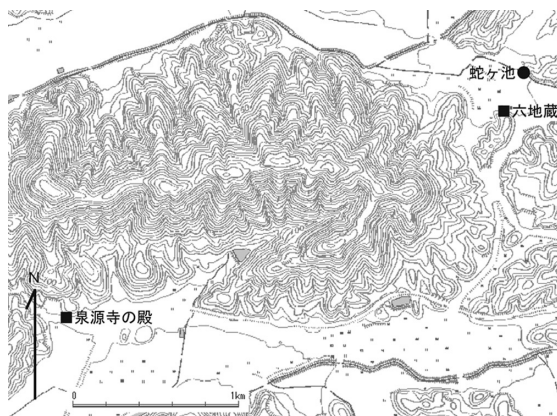


図 19 舞鶴市の「蛇窟入・芋環型」の景観

て、退治したのである。大蛇は遁げる途中で六人の人を呑み殺したので後に白屋の下に堂庁を建て、六地藏として懇ろにまつたと言う。中山の大蛇を射止めし地点は今に蛇地と称呼せられて<sup>(42)</sup>いる。」

その他の地域にも、峠の蛇の話はあるが、ここでは、その棲家が池となっている。そして娘の家は、一二〇年前の豪族とある。やはり地域の権力者の家である。となると、この地域を開発した始祖神話の可能性がでてくる。伝承で語られる年代は、歴史学からいうと、まったく根拠のない話となるだろうが、しかし地域の

人々はなぜ一二〇年前と語るのだろうか。この文献が出された時代から一二〇〇年を引くと、七六五年となり、だいたい八世紀のこととなる。これが本当なら、奈良時代となり、かなり古い伝承ということにもなる。またこの時代は、日本の神話である『古事記』や『日本書紀』が編まれた頃と同じ時代でもある。まさに、神話の時代の伝承なのだ。しかも、地名が残っていたり、証拠物が残っていたりするわけだから、神話の伝承力というのは、とてもないものなのだ。

この伝承のなかで語られる場所も、地図で確認ができる(図19)。それによると、記紀神話の方位とは一致しない。先に紹介した、高城城の蜘蛛の伝承も一致しない。このように、一致しない場合、その要因を、また考えなくてはならないわけだ。先の土蜘蛛でも

方位が反対になるのは、土蜘蛛が異族として討伐の対象になっていたからかもしれない。確かにこの伝承の大蛇も、人々によって、討伐されている。この伝承も隣接する地域であるから、同様の逆転が生じたのだろうか。場合によっては、故意に場所を変えられたとも考えられる。

このように神話は権力と結びつく。その為に、その後の権力が、古い権力を否定するために、様々な操作をする必要があった。方位の逆転はそのことを物語っているのかもしれない。

## おわりに

伝説に語られた、伝承者たちの、時代や人物、場所の特定は、それがゆえに、信頼性を自ら失い、研究対象となりづらかった経緯がかつてあった。が昨今は、さまざまな視点から、その価値が再評価されている。本稿は、その動きの一つとすることが出来るだろう。

しかしながら、やはり、時代についての語りには、あらゆる面で、その判断に躊躇せざるを得ない。語りは、生きた人間から発せられる。したがって伝承とは、どの時代においても、変容する因子を持ち続ける運命にあるのだ。

例えば、戦国時代における天皇家の権威失墜を、文化的側面からくい止めようとする動きがあったと言われる。その文化的側面の一例として、各地の神社の格付けと、その縁起の権威付けがあげられた。<sup>(43)</sup>各地の神社の格を上げようと躍起になった人たちが、貴族に依頼し、その縁起を選定してもらい、各地に持ち帰ったとする

ならば、現在、私たちが調査地で手にする伝承は、このときに、創られたものなのかも知れない。また、王政復古が叫ばれた明治期になって、各地の伝説が、記紀神話との関わりを求め、権威を高めようとした可能性もある。<sup>(44)</sup>

本稿で紹介した伝承も、『古事記』に記述された神話と同じ話型で、そもそもは、王朝の始祖を権威づけるための神話だと解釈されている。しかしながら、この神話には、本来の権威的な意味とは異なる、微妙な問題が、最初から含まれていた。さらに、権威づけという視点から見ると、伝承の所有者は、「出世型」という話型を、選び取るはずだったが、近畿においては、三重県の一事例しか見られない。あとの事例は、どちらかと言えば、蛇の子を産んだり、下ろしたり、あるいは娘を蛇に嫁がせたり、あるいは、殺されてしまう伝承が多くを占め、むしろその家の権威を失墜させるような内容になっている。その点から見ても、後に創られた伝承とは考えにくいのだ。

最初に、伝承の変容モデル図で示したように、もし、本来権威づけのための、神話であったものが、当該地域における、権力者の変遷、価値観の変容、伝承の所有者の交代を理由に、その意味を徐々に逆転させたのであれば、やはり、その方向転換には長い時間を要したろう。つまり古い伝承であった可能性がある、と言って良いことになる。

本稿では、話の外部にある、場所や娘の家に焦点を当ててきた。娘の家が特定でき、確かに、その地域での開拓の始祖に位置づけられるのであれば、神話であった可能性が強い。また、場所の要素は、その神話の内容に、適合する場合とそうでない場合がある。原型と考えられる、三輪山の状況に、近ければ近いほど、古い要

素を持っていると判断できるだろう。

このように、話の型や内容だけでなく、話の外にあって、伝承を支えている要素に注目することによって、新たな神話・伝説・昔話研究の方向が見いだせるだろう。

付記・本研究には、平成一五―一七年度科学研究費補助金(基盤研究(C))「神話・伝説・昔話の場所表現に見る日本人の環境認知の変遷(課題番号15529507)」(研究代表者:佐々木高弘)を使用した。最後に、平成一八年三月三十一日をもって退任される海原徹先生に、本拙稿を献呈させていただきます。

#### 注

- (1) 佐々木高弘「神話・社会そして景観―中国地方の「蛇簪入・芋環型」を事例に―」人間文化研究2、二〇〇〇、三七―六三頁。
- (2) 佐々木高弘「王朝始祖神話的景観構造」『面向新世纪中国歴史地理学―二〇〇〇年国際中国歴史地理学術討論会論集』斎魯書社、二〇〇一、三五七―三七六頁。
- (3) 佐々木高弘「理想郷の景観」地理46―11、二〇〇一、七〇―七五頁。
- (4) 関敬吾『日本昔話大成2』角川書店、一九八九。
- (5) 稲田浩二・小澤俊夫編『日本昔話通観』一―二七、同朋社、一九七七―一九八九。
- (6) 福田晃編『日本伝説大系』一―一五、みずうみ書房、一九八四―一九八九。
- (7) 佐々木高弘「民間説話と場所のセンス―兵庫県の蛇簪入・芋環型を事例に―」兵庫地理45、二〇〇〇、一三―二二頁。
- (8) 前掲注(1)の四六頁を参照。

- (9) 大林太良・吉田敦彦監修『日本神話辞典』大和書房、一九九七、二九六～二九七頁。
- (10) 高田十郎編『大和の伝説』大和史蹟研究会、一九三三、一〇〇頁。
- (11) 野迫川村史編集委員会『野迫川村史』野迫川役場、一九七四、六七三～六七四頁。
- (12) 岡節三編『東吉野村の昔話』、一九八四、五六頁。
- (13) 大塔村史編集委員会編『奈良県大塔村史』大塔村役場、一九七九、三四〇～三四一頁。
- (14) 比較民話研究会「奈良県吉野郡大塔村の昔話(下)」、『昔話研究懇談会編『昔話と伝説』(昔話―研究と資料―第十五号)、三弥井書店、一九八七、一五九～一六〇頁。
- (15) 比較民話研究会「奈良県吉野郡大塔村の昔話(上)」、『昔話研究懇談会編『昔話と世間話』(昔話―研究と資料―第十四号)、三弥井書店、一九八五、一八九～一九〇頁。
- (16) 前掲注(14)、一六〇頁。
- (17) 岡節三他編『天川村の昔話』、一九八四、二三頁。
- (18) 同上、一九頁。
- (19) 前掲注(11)、六八七～六八八頁。
- (20) 十津川村教育委員会編『十津川郷の昔話(二集)』第一法規、一九八九、一三～一九頁。
- (21) 同上、一一一～一一七頁。
- (22) 岡節三他編『川上村の昔話』、一九八〇、六一～六二頁。
- (23) 小川忠彦『三重むかしむかし』光書房、一九七八、四五～五〇頁。
- (24) 伊藤良編『郷土むかしばなし』(郷土館叢書第一集)、尾鷲市郷土館友の会、一九七六、一〇七頁。
- (25) 尾鷲市編『尾鷲市史年表』尾鷲市、一九九四、口絵写真。
- (26) 熊野市教育委員会編『紀伊熊野市の民俗―三重県熊野市育生町・神川町編―』熊野市教育委員会、一九七九、二二〇頁。

- (27) 同上、二二二頁。
- (28) 海山町役場編『海山町史』海山町役場、一九八四、一〇七八～一〇八二頁。
- (29) 中津芳太郎編著『紀州日高地方の民話』ぎょうせい、一九八五、一五八頁。
- (30) 同上、一七一～一七二頁。
- (31) 「熊野・中辺路の民話」編集委員会編『熊野・中辺路の民話』(民話叢書5)、民話と文学の会、一九八〇、七〇頁。
- (32) 本宮町役場総務課編『本宮町10年のあゆみ』本宮町役場、一九六六、六五頁。
- (33) 東洋大学民俗研究会編『南部川の民俗』(『日本民俗調査報告書集成(和歌山)』三二書房、一九八一、四三九～四四〇頁。
- (34) 岩出町誌編集委員会編『岩出町誌』岩出町、一九七六、一一四三～一一四四頁。
- (35) 上田幸一「熊野川町の伝説を尋ねて」、熊野地方史研究会編『熊野誌』第34号、一九八八、一二〇～一二二頁。
- (36) 和歌山県民話の会編『高野・花園の民話』(きのくに民話叢書4)、和歌山県民話の会、一九八五、一二二頁。
- (37) 日置川町誌編さん委員会編『日置川町誌 通史編上巻』日置川町、一九九六、六一五～六一六頁。
- (38) 和歌山県民話の会編『大辺路―日置川・すさみの民話―』(きのくに民話叢書6)、和歌山県民話の会、一九九〇、二二頁。
- (39) 田五百次・坪井忠彦『口丹波口碑集』郷土研究社、一九二五、九〇頁。
- (40) 磯貝勇『丹波の話』東書房、一九五六、九八～九九頁。
- (41) 綾部市史編さん委員会編『綾部市史 上巻』綾部市役所、一九七六、一九六～一九八頁。
- (42) 府立東舞鶴高等学校郷土クラブ編『郷土の伝承』、一九六五、六頁。
- (43) 脇田晴子『天皇と中世文化』吉川弘文館、二〇〇三。
- (44) 齊藤純「記憶の変貌―魚見石の伝説から」、小松和彦編『記憶する民俗社会』人文書院、二〇〇〇、一五四～一九〇頁。